

平成25年度 第3回さいたま市文化芸術都市創造審議会

1 日 時 平成26年2月20日（木）午前10時～12時

2 会 場 さいたま市役所 本庁舎 2階 特別会議室

3 出席者

(1) 委員（6名）

加藤種男、青木康高、安島瑠山、島賴子、永島邦夫、服部圓

(2) 事務局（7名）

市民・スポーツ文化局 和田局長

スポーツ文化部 川島部長、金子次長

文化振興課 大西課長、織田課長補佐、高橋主査、横溝主任

4 公開・非公開の別 公開

5 傍聴人の数 0名

6 内容

(1) 開会

(2) 挨拶

(3) 議事

①文化芸術都市創造計画素案（案）について

②（仮称）さいたまトリエンナーレ基本構想（案）について

(4) その他（事務局からの報告）

・本日の会議結果は公開することとし、会議録及び会議の開催結果を事務局にて作成し、各区情報公開コーナーでの閲覧、さいたま市ホームページへ掲載を行う旨を説明。

(5) 閉会

会議記録

○開会宣言、市民・スポーツ文化局長挨拶、議事（1）文化芸術都市創造計画（案）について、事務局より資料に基づき説明。

事務局 <資料説明>資料1「さいたま市文化芸術都市創造計画（案）について（説明資料）」、資料2「さいたま市文化芸術都市創造計画（案）」を説明

加藤会長 ご質問、ご意見はいかがでしょうか。

安島委員 資料2の29ページに、「現代短歌関連事業の実施」と書かれていますが、現代短歌は、さいたま市とどのような関係がありますか。

事務局 第二次大戦後、いわゆる現代短歌が浦和で始動し、その後、多くの歌人がさいたま市に関係し、戦後から現代までの歌壇を牽引してきたという歴史があります。このような歴史を踏まえ、現代短歌については、現在、教育委員会において「現代短歌新人賞」や「さいたま子ども短歌賞作品集の刊行」といった事業を行っています。

さいたま市における現代短歌については、現時点では、まだなじみが薄いかもしれません、計画の施策5の基本的な考え方としては、本市の埋もれている資源を発掘して、それらを活用していくというものです。そうしたことから、取組例として位置付けたものです。

安島委員 教育委員会が、「さいたま子ども短歌賞」という事業を始めたのは、いつからですか。

事務局 この事業は、本年度が第1回です。現代短歌新人賞は第14回を迎えてます。

安島委員 それはどこが主催していたものですか。

事務局 主催はさいたま市教育委員会です。

加藤会長 そのほかにいかがでしょうか。

島委員 分野があまりに広くて、よく分からぬですね。このパブリック・コメントを少し読んでいたら、見沼田圃は、人間が江戸時代に開拓してつくったものだから本当の自然とは言えないのではないかという意見があり、おもしろいなと思いました。

加藤会長 さいたま市に限りませんが、日本の自然のほとんどには、人の手が入っているわけです。そういう意味では、見沼田圃も人の手が入っていると言わればそのとおりだと思いますが、例えば、自然公園と言っていても、木を植えたり、池をつくりたり、いろいろするわけですから、普通の日本語として自然と言ったとしても間違ってはいないと思います。

島委員 見沼田圃の緑や元荒川の水辺に象徴される自然といった表現になっているの、このような意見に配慮できているのかなと思っています。

加藤会長 荒川も自然のままでなくて、あれだけ丁寧に護岸工事をして、流路も整備しているわけですので、厳密には自然ではない。しかしながら、もとの自然を生かしているわけですから、このような表現でもいいと思います。

島委員 そうですね。自然と言っても別に構わないと思います。

永島委員 事前に、この資料をいただいて、一通りは読みましたが、非常に幅が広いと感じました。

パブリック・コメントを読んでみると、先ほどの見沼田圃に関する意見をはじめ、さまざまな意見が出ています。想定外の意見もあり、このような考え方もあるのかなという視点で見てきましたが、意見反映については、おおむねこれでよろしいのではないかと思います。

青木委員 私も永島委員と同じ意見です。計画（案）については、パブリック・コメントの意見を反映したり、庁内などで検討していただいた上で、このような形になつたものだと理解しています。パブリック・コメントを読みますと、さまざまな意見が寄せられていますので、これらを全て取り入れることは不可能だと思います。私は、最終案はこれでいきたいと思います。

永島委員 確かに、パブリック・コメントやタウンミーティングでは、さまざまな細かい意見が出ています。どのような案であっても、多様な意見は出てくるとは思いますが、パブリック・コメント制度を通じて市民の皆様に意見を打診して、このように反映しているわけですから、今回はこうした方針でいいのではないかと思います。

加藤会長 本当に丁寧に反映していますね。それでは、よろしいでしょうか。
本件は、この案をもって審議会の答申としたいと思いますが、よろしいでしょうか。

各委員 はい。

加藤会長 ありがとうございます。では、これをもって答申といたします。

事務局 <資料説明>資料3「（仮称）さいたまトリエンナーレ基本構想（案）について（説明資料）」、資料4「（仮称）さいたまトリエンナーレ基本構想（案）」を説明

加藤会長 では、ご質問、ご意見がありますか。

永島委員 「化学反応を起こす」という表現があります。いろいろな団体が集まって交流しているうちに化学反応を起こして、更なる芸術の進化を遂げるようなイメージかと思いますが、「化学反応」という表現は差し支えないのでしょうか。

加藤会長 もう少しクリエイティブな表現にできないでしょうか。「このようなことを通じて新たな文化を創造していく」というような表現のほうがいいかもしれません。

事務局 話し言葉としては一般的に使っていますが、確かに、書類に落とすと違和

感があるかもしれません。ご指摘を踏まえ、修正したいと思います。

加藤会長 いろいろなものが出会ったり、交流したりして、まさに新たな文化を創造していくことがトリエンナーレを開催することの意味でしょうから、文化的な表現のほうがいいかもしれません。よろしくお願ひします。

ほかにいかがでしょうか。

島委員 さいたまの文化芸術というと、盆栽、鉄道、漫画、人形で、音楽や美術はあまり出てこない。私は音楽が専門ですから、盆栽などの資源を活用して行うということが少しイメージできません。別々の分野を総合して、お互いに触発し合って、さいたまの特色を生かした文化を創造するというのは、口で言うのは簡単ですが、どうやって実現するのか、少しイメージが湧きません。

それと、芸術にはプロとアマがいる。一流のプロを呼んできて演奏する部分と市民が演奏する部分を融合して、触発し合い、それこそ化学反応を起こすというやり方もいろいろありますが、具体的にどのように展開していくのか、難しい部分があると思います。

また、3年ごとの定期的な開催を目指す中で、1回目に何もかも欲張ってしまうと、次は何をするのかということになってしまうような気がします。ですから、1回目はこのジャンルとこのジャンルで、2回目はこのジャンルとこのジャンルというような形で、少し絞って考えたほうがいいような気がします。それは、今考えることではなくて、準備委員会等の方が考えることかとは思いますが、あまりに総花的にあれもこれも全部ひっくるめて開催しましょうというのは、何か想像がつかない。先のことを考えると、2度目、3度目を見越した計画も必要ではないかと思います。

加藤会長 今の島委員のご意見は、ぜひ準備委員会等の中で検討していただくようお願いしたいと思います。トリエンナーレを開催する元々の考え方は、全て新しい表現、新しい作品、新しい出し物など、新たにつくられたものを提示するというのが、根幹にあります。つまり、ジャンルとして伝統的なものであったとしても、トリンナーレのためにつくられたものを展示するという考え方なわけです。

島委員の総花的に行うよりも、2回目、3回目を見越してどこかに重点を置いて開催したほうがいいというお考えについては、2回目に行なうことがなくなるという心配はなく、むしろ、必ず、その回には新しいことを提示してもらわないと困るということだと思います。前にやったから3年後にはネタがなくなるという性格のものではなくて、3年ごとに必ず新しいことを展開していくというのが、トリエンナーレの考え方です。

島委員 新しいものを生み出していくということですと、例えば私の専門の音楽で言えば、一流のオーケストラを連れてきてベートーベンの交響曲を演奏するということは、トリエンナーレの考え方とはかけ離れてしまうわけですね。

加藤会長 基本的に、オーケストラを連れてくるところまでは別にいいとは思いますが、従来と同じスタイルでベートーベンの曲を演奏することは想定していない。新しい曲を演奏するのか、新しい演奏法の一つにベートーベンを取り入れるのか、そこはそれぞれの方々がお考えになることですけれども、従来の演奏スタイルをそのまま持ってくることはあり得ないと思います。

島委員 では、現代曲といいますか、委嘱して書き下ろしの現代曲を演奏するということであれば、トレンンナーレの趣旨に沿っているわけですか。

加藤会長 それはまさに新しい表現ですから、大いにあります。また、ベートーベンを別の方で表現するということも可能性としてはありますね。

島委員 それは少し邪道になると思います。別のやり方という意味では、古楽器で演奏するというのは例があります。

加藤会長 もし、近年において古楽器でベートーベンを演奏するということが行われていないのであれば、それは新しい表現と言えると思います。

島委員 市民を巻き込んで行うとなると、例えばオーケストラが来て、市民も一緒に入って演奏するというのもあり得ると思います。

加藤会長 それは画期的だと思います。そのようなことは想定されていると思います。

島委員 例えば、市内の高校生がプロと一緒に演奏するというのは、高校生にとってはすごく刺激になりますね。これはトレンンナーレの趣旨に沿っていることになりますか。

加藤会長 さいたまらしさを出すために、プロだけではなく、市内のアマチュアも参加する。しかも、別々に行うのではなくて、両方が一緒に行うというようなことは、想定する意味はあると思っています。

島委員 それでは、指揮者が来て、あらかじめ高校生を指導する場を設けて、一緒に演奏するということは、一つの可能性として考えていいわけですね。

加藤会長 同じステージに立って一緒に演奏し、共感するということは、非常に重要なことだと思います。

島委員 例えばカルメンのオペラを演奏する際に、地元の小中学生の合唱団と連携し、あらかじめ指導などをして、公演を行うというのもいいのかなと思います。

加藤会長 具体的な方法は、実際にやる人たちにゆだねられるでしょうけれども、雰囲気としてはそういう感じでしょう。

安島委員 そもそも、このトレンンナーレは、現代美術を核として、現代美術の作品を制作して展示するということは、決定事項でしょうか。

事務局 決定ということではありません。前回の審議会でお示しました基本構想の骨子案では「現代美術を中心として」という表現が入っていました。しかし、会議の中でこの表現については削除するべきではないかとのご意見を受け、修正しておりますので、現時点では、現代美術を中心にするということは、考えておりません。ただ、各地で行われている先行事例を見ますと、現代美術を中心としたものが多いという状況はあります。

安島委員 いただいた資料に、「アーティストの最先端の作品の展示等」という文言が

あったのでそのように理解したのですが、現代美術というのは、僕だけかもしれませんのが、時に不可解なことがあります。これがさいたま文化の創造と発信という目的に沿うものになるかというと、少なくとも僕はそういうものがイコールとして頭の中で結びつきません。

トリエンナーレとしたのは、事業規模、予算規模の問題が先にあったのか、それとも、現代美術というものが先にあったのでしょうか。前回の会議において、有識者ヒアリングの説明の中で、トリエンナーレとは、現代美術の展覧会であり、新しいものを出すことであるというような説明があったかと思います。私は、そこで今回のトリエンナーレというものが、現代美術が中心であると理解しました。

もし、現代美術にとらわれていないということであれば、むしろ、全くそれを外してしまうという方向性はないのでしょうか。

加藤会長 これは事務局が答えにくいと思うので、代わりにお答えします。これから準備委員会なりプロデューサー、ディレクターがいろいろ議論をして、コンテンツを決めていく中で、現代美術を活用するか否かは検討されていくことだと思います。このような詳細な内容については、今後、さまざまな検討が想定されるので、基本構想の中では、最先端のアーティストたちには、是非良いものを作ってもらい、市民も参加できるようにし、そして、いろいろな人たちの出会い、ふれあいの場を設けるといった方針までを定めています。

こうした方針を踏まえ、事業内容を検討していく上では、今、安島委員がおっしゃったような、現代美術には不可解と感じる部分があるといったご意見についても、ぜひ、準備委員会等に申し送りをしていただきたいと思います。

島委員 先ほど、トリエンナーレというものは新しいものを生み出すということをおっしゃいましたが、考えてみると、これはまだ仮称ですね。名称が「さいたま芸術祭」となれば、このようなことは関係なくなるわけですか。

加藤会長 もちろん、仮称ですから、名称が「芸術祭」に変わる可能性はあります。しかしながら、少なくとも、特定のジャンルに限定せず、幅広いジャンルを考慮するという方針については、この審議会で議論してきたところだと思いますので、このような方針に基づき、準備委員会等でご検討をいただくものと考えております。

島委員 例えば「さいたま芸術祭」という名前になったら、オーケストラがベートーベンを演奏するといったことも可能なかなと思いました。

加藤会長 ただ、そもそも構想が新しい表現法でやりたいということだと思いますので、少なくとも主流にはならないでしょう。採用されるかもしれないし、それは分からないです。それは準備委員会等がお考えになることですから。

島委員 そこはプロデューサーが考えるでしょう。

加藤会長 中には、ベートーベンが不可解という人も絶対にいると思います。

島委員 それはきりがないですよね。

加藤会長 さまざまな文化芸術が、お互いにできるだけ許容し合い、幅広く考えていた

だき、今までにない手法でさいたま市らしく開催したい。そうなれば、結構、画期的だと思います。ほかにいかがでしょうか。

青木委員　　スケジュールについて伺いたいと思います。平成26年10月～12月に、キックオフイベントの開催というのが基本構想の中に入っています。今が2月ですから、時間的にもうあまりないと実感しています。キックオフイベントに向けて、さいたま市の体制をどのようにお考えでしょうか。当然、トリエンナーレの実施に当たっては、文化振興課が中心になると思いますが、専属に携わるポジションを用意して進めるのか、もしくは兼務で対応するのかといった点について伺いたいと思います。

事務局　　キックオフイベントにつきましては、現在、予算要求をしている段階で、これから市議会においてご審議いただくこととなります。準備委員会の設立が来年度ということもございますので、ある程度、文化振興課において準備を進めているところでございます。

内容につきましては、彩の国さいたま芸術劇場の開館20周年と合わせて、県と共に、音楽イベントを開催するということで調整しております。2日間を予定しており、1日目は、一流の音楽家の演奏、2日目は、どちらかというとファミリー層に楽しんでいただけるようなトーク＆コンサートを考えております。

また、来年度の実施体制につきましては、文化振興課内に新しくトリエンナーレ係を設置する予定です。

青木委員　　ということは、専属で取り組む職員がいるということでしょうか。

事務局　　はい。

青木委員　　トリエンナーレは、規模が大きいので、専属の人たちで取り組まないと、追いつかないのでしょう。3年ごとに1回とはいっても、時間があるようで、ないですからね。分かりました、ありがとうございます。

加藤会長　　ほかにいかがでしょうか。

服部委員　　これだけのことを行うのであれば、皆さんで真剣に取り組んでいただきたいということと、4月から6月にディレクターの決定とありますが、これは既にどなたか決まっているのではないか、ただ決定ができないだけかなと感じました。

政令市120万都市として、少しきつい言い方で申し訳ないのですが、大変なお金を使って開催するわけですから、ぜひ、その場限りのものにならないようにしていただきたい。そして、大変なことだとは思いますが、きちんとした計画のもとに予算を組んで開催し、さすがさいたま市だと皆さんに思ってもらえるようにしていただきたいと思います。

永島委員　　確かに、組織づくりから始めるわけで、準備委員会なり組織を立ち上げるのは並大抵のことではないと思います。過去に経験があれば別ですが、初めてのことですから、大変だと思います。

島委員　　開催期間はどのくらいの予定でしょうか。

事務局 開催期間についても、来年度の準備委員会の中で事業内容とあわせて考えたいきたいと思っていますが、先行事例では、50日から100日くらいまで比較的に多いようです。

島委員 2カ月くらいですね。

事務局 はい。先行事例を見ると会期はさまざまですが、国際芸術祭のご経験を持つ方のご意見を踏まえると、おおむね100日位は必要ではないかと考えております。

服部委員 事業費が大変だと思います。

事務局 開催期間や規模で異なります。

加藤会長 あえて基本構想の事業規模の項目に参考として他の事例を挙げているということは、このくらいの規模でこのくらいのことを行いたいという期待値があるということかと思います。

「さいたま市はよくぞやった」という結果にならないといけないので、そういう意味では、特色があることを展開してもらいたいと思います。

また、トリエンナーレのような事業を行うことによる隠れた効果があつて、一つは市の中でいろいろな人材が育成されるといった効果や、パブリック・コメントの意見にもありました。例えば練習場がもっと必要だとか、発表の機会をもっと増やしてほしいといった事柄に関するシステムといいますか制度化をすることが可能かもしれない。トリエンナーレをきっかけに、今後、文化芸術振興のための幾つかの制度が生まれる可能性があると思います。

もう一つは、これもパブリック・コメントの意見の中にありました。プラザやうらわ美術館などの市が持っている既存の文化施設の活性化、飛躍につながる可能性があるということです。こうしたイベントを機会に、これらの既存文化施設を飛躍させるということも隠れた大きな目的として視野に入れて進めていただきたい。

後に何が制度として残るか、遺産として残っていくかということも重要な要素なので、制度づくりと既存文化施設の飛躍を期待したいと思います。

また、これだけ大きなお金を使うのはどうかという異論の声に答えるために、10年先を見据えた制度づくりや文化施設などの飛躍、活性化、10年後に活躍できる人材育成など、これらの隠れた効果についても、市や実行委員会からアピールしていく必要があると思います。

服部委員 10年後を見据えてということですが、これからは高齢化が進んで子どもの数も少なくなる。経済状態も今はよくなっていますが、10年後は分からぬ。また、国の支援の形も変わるかもしれない。もし10年後を見据えて行うのであれば、将来の人口形態など、さまざまな要素も考えながら計画していただきたいと思います。そうでもないと市の運営そのものが大変になっていくと思います。

加藤会長 非常に大事なことをおっしゃいました。個人的には、裏テーマを「高齢者のための芸術祭」にしたらいいと思うくらいです。どこも若者向けにはこのようなイベントを開催します。若い人は喜ぶけれども、必ずしも高齢者はついてい

けないというものではいけない。むしろ、高齢者が生きがいを持続していくためにこのようなことが必要ですよというようなテーマも打ち出していければいいなとは思っています。

ただ、ダイレクトに高齢者に向けたことだけを行えばいいかというと、必ずしもそうとは言えません。若い人が参加してきて、それによって高齢者も元気になるわけです。

島委員 さいたまゴールド・シアターというものがありますよ。

加藤会長 ありますね。ぜひ、あのような取組もトリエンナーレに参加していただきたいと思います。

さまざまご意見を踏まえて、さらに良いものにブラッシュアップしていきたいと思いますが、私から一点申し上げたいと思います。

展開方針のところで「①国内外の一流・新進アーティストによる最先端の作品展示や公演の実施」と「②市民による文化芸術活動の支援」が分けて書かれていて、「③アーティストと地域や来訪者の交流を促進する各種イベントの実施」で出会いや交流はあるとは思いますが、「①と②の交流とか協働に十分に配慮するように」という文言を本文のどこかに入れておいていただくといいかなという気がします。

両方がばらばらよりは、先ほど島委員がおっしゃったような、プロのオーケストラと高校生と一緒に演奏するようなイメージがあるほうがいいので、交流とか協働、用語は何がいいか分かりませんが、そうしたことも重視しながら進めるという方向性がより分かりやすくなるようにしておいていただけたらと思います。

今後、多少、文言の修正はあるかもしれません、審議会としては、本案をもって、審議会答申としたいと思いますが、よろしいでしょうか。

各委員 はい。

加藤会長 ありがとうございます。それでは、本案をもちまして、当審議会の答申としたいと思います。

おかげさまで、これで、去る平成24年5月29日付けで当審議会に諮詢された文化芸術都市創造のための計画及び文化芸術都市の創造に関する施策についての答申がまとまりました。委員の皆様には、長期間にわたるご協力に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

この答申は、後日、私から市長へ提出させていただきます。その体裁や若干の文言の修正等があった場合は、会長に一任いただくということでよろしいでしょうか。

各委員 はい。

加藤会長 ありがとうございます。

最後にこれだけはということが何かございますか。よろしいですか。
それでは、以上で議事は全て終了しました。ありがとうございました。